

宮古島における3型アクセント体系の発見：与那覇方言の場合

著者	松森 晶子
雑誌名	国立国語研究所論集
号	6
ページ	67-92
発行年	2013-11
URL	http://doi.org/10.15084/00000512

宮古島における3型アクセント体系の発見

——与那覇方言の場合——

松森 晶子

日本女子大学／国立国語研究所 時空間変異研究系 客員教授 [-2013.03] ／国立国語研究所 共同研究員

要旨

琉球諸語の先行研究では、宮古島の与那覇方言は「ごく区別のしにくい」2つの種類の音調から成り立っており、そのためこの方言は型の「曖昧化」の一途をたどっている、と記述されてきた。これに対し本稿では、この与那覇方言の2つの種類の型は、特定の条件を満たした文節の中で非常に明瞭に区別でき、それには「3モーラがひとつの単位となってフットを形成し、H音調はそのフットに実現する」という制約が関与していることを論じる。

さらに本稿では、この方言のアクセントが、これまで記述されてきたような「2型体系」ではなく、はっきりとした「3型体系」であることを、特にその「複合語のアクセント」に焦点を当てて示す。また、その3種の音調型のすべてが明らかになるためには、少なくとも「3つ」の音調領域が並ぶ必要がある、ということも提案する。

さらに、このような「フットの成立が型の区別とかかわる」ことや「3つの音調領域が並んだ場合に、はじめて3つの型の区別が出現する」といった与那覇方言の特徴は、他の宮古諸島の方言にも共通して見られる特性である可能性を示唆し、このようなことを前提とした新たな観察法や着眼点によって、今後も宮古島に3型体系が発見される可能性があることも、あわせて論じる*。

キーワード: 3型体系, フット, 琉球語, 宮古島, 与那覇方言

1. 宮古諸島のアクセント記述研究—記述の着眼点転換の必要性

宮古諸島には、1960年代に平山・大島・中本(1967)(以下、平山ほか(1967)と記す)によってそのアクセント記述研究に先鞭がつけられて以来、多くの地域で「1型体系」または「無アクセント体系」が分布していると考えられてきた。平山(編著)(1983:43)では、宮古諸島にも、(狩俣など)宮古本島の北部、(城辺など)宮古本島の南部、多良間島、池間島、伊良部島佐良浜・国仲や、宮古島の西原などの地域に、2つのアクセント型が対立する「有型アクセント」体系が観察される、との指摘があるが、その後が続いて次のような記述がある。

- (1) しかし、これら諸方言のアクセントは、他の琉球諸方言(例えば奄美本島の名瀬、沖縄本島の首里、八重山の石垣、与那国の祖納他)と比較すると、型の区別はそう明瞭ではない。

今回は、20余年前、数次にわたって調査した当時と比べると、一層、曖昧化が進んで

* 本稿は、2013年2月17～18日に開催された音韻論フェスタにおける発表の内容にもとづいており、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」(プロジェクトリーダー: 木部暢子)、および「日本語レキシコンの音韻特性」(プロジェクトリーダー: 窪田晴夫)の研究成果の一部である。本稿の草稿を詳細に読み、的確なコメントをくださった査読委員の方に篤く御礼申し上げます。本稿のためのデータは、1999年12月および2012年12月に行われた与那覇方言の調査によって得られたものであり、熱心に与那覇方言をお教えたいただいた話者の皆様には、心より感謝いたします。なお本研究は、科研費補助金基盤研究A(課題番号22242011)「日本語のアクセントとアクセント類型論」(研究代表者: 窪田晴夫)の助成を受けている。

いるように観察された。これらは、将来、平良市の市街地区や伊良部町の南部（伊良部・仲地・長浜・沢田）などのような一型ないし一型と無アクセントとの中間的相になるのではないかとあやぶまれる。平山（編著）（1983: 43）

この（1）に代表されるような考え、つまり、宮古諸島に観察される2型アクセントの多くは、現在、型の「曖昧化」の途上にある（平山（編著）1983: 175-180）、それによって究極的には「1型」あるいは「無アクセント」に変化していく、というような考えは、ごく最近に至るまで宮古諸島アクセントの記述研究における通説となっていた。

このような流れの中、Matsumori（2001）、松森（2008, 2010）では、従来の記述研究とは異なるタイプのさまざまな助詞を名詞に付けて検討することによって、（それまで2型体系と考えられてきた）多良間島に、明瞭な「3型」アクセントが現存していることを報告した。また、崎村（2006）に対する書評である松森（2008）は、今後の南琉球の諸方言のアクセント研究のあり方に関して、以下のように述べている（以下の下線部は本稿で付けられたものであり、原文にはない）。

- （2） このように、特に先島諸方言については、先行研究とは異なる条件でより詳しい調査・分析を施してみることによって、あらたな発見がなされる可能性がまだ残されている、と私はみており、したがって特にこの部分の本書の記述については、やや結論を急ぎすぎているような印象を受けたことは否めない。（松森 2008: 140）

（2）の下線部で示した見通しの妥当性は、ごく最近になって宮古諸島にも「3型」アクセント体系の発見が相次いで成されることによって、徐々に明らかになりつつある。前述の多良間島方言における3型体系の発見はその一例である（松森 2010）が、それに引き続いて、五十嵐・田窪・林・ベラルー・久保（2012）（以下、五十嵐ほか（2012）と記す）は、従来「2型体系」と見做されてきた池間島のアクセントも、実は「3型体系」であるという重要な発見を成し遂げている。ここで特筆すべきは、この池間島の3型体系の発見が、先行研究によって採用されてきたアクセント記述・観察の方法とは「異なる」方法（あるいは着眼点）を導入することによって、はじめて成し遂げられた、という点である。

平山ほか（1967）以来とられてきた従来の方法とは、一部の名詞（特に比較的音節（モーラ）数の少ない短い名詞）に nu（主格）や nudu（主格＋焦点標識）などの代表的な助詞（助詞連続）を付け、その「文節」内のアクセント型を観察しながら型の区別の有無を判断する、というようなものであった。これに対し五十嵐ほか（2012）では、このような文節単位のアクセントの観察にとどまっていたのでは池間島の3型体系は明らかにならず、文節に述語を後続させ、その述語で発話が終わる文全体のピッチパターンを観察することによって、この方言が3型体系であることがはっきりと確認できることを明らかにしたのである。

このように、従来とは異なる観察方法の導入や着眼点の転換が、今後も琉球アクセントの記述研究には重要だ、と私は考えている。

そこで本稿では、宮古島の与那覇方言を取り上げ、このような記述上の着眼点の転換が、あら

たな発見にどのようにつながっていくのかについて論じたい。具体的には、この方言のアクセントが、これまで記述されてきたような「2型体系」なのではなく、れっきとした「3型体系」であることを、特にその「複合語」の示す音調型の記述結果に焦点を当てて示すこととする。

この与那覇方言アクセントの近年の記述研究としては、崎村 (2006: 66) をその代表として挙げるができる。それを参照すると、この与那覇方言は「ごく区別のしにくい」2つの種類の音調から成り立っており、そのためこの方言は「1型音調ないし無型音調の方言にごく近づいたもの」というように記述されている。したがって崎村 (2006) の与那覇方言の記述は、基本的には、(1) に示されたような平山 (編著) (1983) の発想を踏襲したものと考えてよいだろう。

これに対し松森 (2013) では、この与那覇方言の2種類の型は、けっして「区別のしにくい」ものではなく、(後述するような) 特定の環境において、非常に明瞭に区別され得ることを示した。あわせて、この方言の2種の型の対立が、ある特定の条件のもとに合流してしまい、「一見」判別しにくくなってしまいうように見えるのにも、確固とした理由があるということも論じた。つまり松森 (2013) は、この与那覇方言の体系は、「1型音調ないし無型音調の方言にごく近づいたもの」ではけっしてないことを論じたのである。

今回は、その松森 (2013) の路線をさらに引き継いで、この与那覇方言は、実は「2型アクセント」ではなく「3型アクセント」である、ということを示したい。

この与那覇方言では、複合語アクセントにいわゆる「式保存 (前部要素が複合語全体のアクセント型を決定する規則)」が成り立っている。その式保存に着目しながら、語根が2つからなる複合名詞 (「酒甕, かつお味噌, にんにく畑」など) を作成し、それらにある特定の助詞、および助詞連続を付けて型の区別の有無を検討した結果、与那覇方言には次のような特徴が存在することを確認した。

(3) 与那覇方言の特徴 (その1)

3種の音調メロディー (LLH, LHL, HLL) からなる3つの型を持つ言語体系である。

まず次節では、松森 (2013) の分析結果をもとにして、この方言が次のような特徴を持っていることを確認する。

(4) 与那覇方言の特徴 (その2)

- a. H音調は3モーラをひとつの単位としたフットに結びついて実現する。
- b. 音調を担う単位は、名詞、名詞 + 1モーラ助詞、語根、および助詞連続などである。

たしかに多くの先行研究が指摘するように、この与那覇方言の2種類の型は「ごく区別のしにくい」ものように見える (聞こえる?)。そのためにこの方言は、平山ほか (1967: 26) では、型の区別が「曖昧化」している方言の代表格のような取り扱いを受けている。

しかし本稿の第2節でまず論じるのは、与那覇方言のこの2種の型は、けっして「曖昧化」しているわけではなく、非常に明瞭に区別できる、ということである。そして、この2種の型の区別が合流してしまうように「見える」のには、この方言が (4) のような性質を持っていること

が関与している、ということも論じる。より具体的に言えば、この方言では、H音調が結びつけられた領域の内部が「3モーラ」に満たない場合に、2つの型の違いが合流してしまう（つまり1型化しているように見えてしまう）ことを示す。

次節では、まず、このことを具体的に見てみよう。

2. 与那覇方言には、明瞭な2種の型の対立が存在する

前述のように、松森（2013）では、与那覇方言の2つの型は非常に明瞭に区別できることを論じた。今、この与那覇方言の2つの型を、五十嵐（2012）にしたがって、仮に「AB型」と「C型」のように呼び分けることとしよう。

これより前、(かなり昔のことになるが) 私の1995年の調査において、この与那覇方言には（これまで他の方言には報告されてこなかったような）非常に興味深い現象が存在していることに気がついた。すなわちこの方言には、ある特定の助詞が名詞の後ろに付加した場合、その名詞が「2モーラ名詞か、3モーラ名詞か」という条件の違いによって、その名詞の本来持っている型の区別が不明瞭になったり、明瞭になったりする、という事実である（松森2013を参照）。

この点を検証するために、まず2モーラの単純名詞に、特定の助詞や助詞連続が付加した場合について検討してみよう。

たとえば2モーラの名詞に並列助詞 meR「も」を後続させ、「～もある～ meR aI」のような文に入れて発音してもらった場合について見てみよう。（与那覇では、この助詞を mai と発音する話者もいたが、以下 meR のほうで統一することにする。）五十嵐（2012: 62）の観察結果にもあるように、この環境では2種類の型の違いは確かに不明瞭になる。つまりこの環境では、AB型とC型は、(5)に示されたように、両者とも同じような型で出現するのである。（以下、「…」という記号は、後ろに語句が続くこと、つまりそれが「接続形」であることを表す。）

(5) 2モーラ名詞に meR「も」が後接した場合の音調型

[AB型]	kazi $\overline{\text{meR}}$... (風も…)	pana $\overline{\text{meR}}$... (花も…)
[C型]	usi $\overline{\text{meR}}$... (臼も…)	puni $\overline{\text{meR}}$... (骨も…)

同様に、この並列助詞 meR の後ろに焦点標識 du を付加して、3モーラの助詞連続 meRdu（並列助詞 meR + 焦点標識 du）を作って、同じ2モーラ名詞に後続させた文に入れてみても、やはりAB型とC型の違いは明瞭にはならない。

(6) 2モーラ名詞に meRdu が後接した場合の音調型

[AB型]	saki $\overline{\text{meRdu}}$... (酒も…)	pana $\overline{\text{meRdu}}$... (鼻も…)
[C型]	nabi $\overline{\text{meRdu}}$... (鍋も…)	puni $\overline{\text{meRdu}}$... (骨も…)

同じような3モーラの助詞連続 karadu（奪格助詞 kara + 焦点標識 du）、gamidu（到格助詞 gami + 焦点標識 du）、sjirdu（具格助詞 sjiR + 焦点標識 du）の場合にも、同様な型の合流傾向が観察された（松森2013: 5）。しかし詳細は松森（2013）にゆずることにし、以下は karadu が付加

した場合についてのみ載せる。

(7) 2 モーラ名詞に karadu が後接した場合の音調型

- [AB 型] mizI $\overline{\text{karadu}}$... (水から…) fucI $\overline{\text{karadu}}$... (口から…)
 [C 型] nabi $\overline{\text{karadu}}$... (鍋から…) usI $\overline{\text{karadu}}$... (臼から…)

さて、ここまでの現象を見てみると、確かにこの方言は、平山ほか (1967: 27) や崎村 (2006: 65-66) などの先行研究が指摘してきたように、2つの型の区別が「不明瞭」で、あたかも「1型音調の方言に近づいた」体系であるかのように感じられてしまう。

ところが、出だしの名詞部分を3モーラのものに入れ替えて、同じような助詞(助詞連続)をその後ろに付加してみると、(5)～(7)の場合とはうってかわって、この方言の2種の型の区別が、非常に明瞭に出現した。

たとえば、AB型の buduI (踊り) という名詞が先頭に来る文では、buduI $\overline{\text{meRdu}}$ aI (踊りもある) のように助詞連続部分が高くなる。これに対して、この名詞部分をC型の aRgu (歌) に入れ替えた文を発話してもらくと、 $\overline{\text{aRgu}}$ meRdu aI (歌もある) のように、先頭の名詞部分が高くなり、助詞連続部分のピッチは低く抑えられるのである。

次の例は、3モーラ名詞に meRdu を付け「～もある～meRdu aI」のような文を発音してもらった場合の音調型であるが、これを見ると、AB型とC型の違いは、非常に明瞭に区別できることが分かる。

(8) 3 モーラ名詞に meRdu が後接した場合の音調型

- [AB 型] buduI $\overline{\text{meRdu}}$... (踊りも…) kagaM $\overline{\text{meRdu}}$... (鏡も…)
 [C 型] $\overline{\text{fusuI}}$ meRdu ... (葉も…) $\overline{\text{pasaM}}$ meRdu ... (鉢も…)

この meRdu が後続した場合と同じことが、karadu (奪格 kara + 焦点標識 du) や sjiRdu (具格 sjiR + 焦点標識 du) などが後続した場合にも言えたのだが、以下には karadu の場合のみ載せる(詳細は松森 2013 を参照)。

(9) 3 モーラ名詞に karadu が後接した場合の音調型

- [AB 型] aVva $\overline{\text{karadu}}$... (油から…) taRra $\overline{\text{karadu}}$... (俵から…)
 [C 型] $\overline{\text{soRki}}$ karadu ... (籠から…) $\overline{\text{makaI}}$ karadu ... (椀から…)

このように与那覇方言では、文節の初めにくる名詞が「3モーラ」という条件を満たした場合に限って、それにさまざまな助詞、助詞連続を連続させて文を作ると、そのほとんどの場合に、AB型とC型の2種の型の違いが非常に明瞭に出現することが判明した(松森 2013: 7-8)。

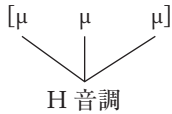
つまり同じ助詞連続が付加しても、それが「2モーラ」名詞に付いた場合には、(6)(7)に見られるように2種の型の区別が「不明瞭」になるのに対し、それが「3モーラ」名詞に付いた場合には、(8)(9)のように、その型の区別が非常に明瞭に出現する、というような性質が、この与那覇方言にはあるのである。

当初は、一体なぜこのような現象がこの方言に見られるのかが、理解（解釈）できなかった。しかしその後、それが「3 モーラを 1 単位として音調が実現する」というような特徴がこの方言に存在する、と考えればよいことに気付いた。

そこで松森 (2013) では、この事実を説明するために、Shimoji (2009) が伊良部島のアクセントを記述するにあたって提唱した、モーラを単位とした「フット」という概念を採用して、説明を試みた。(ただし、伊良部島方言では「2 モーラ」がひとつのまとまりとなってフットを形成するのが無標のパターンである (Shimoji 2009) のに対して、この与那覇方言の場合は、原則的に「3 モーラ」がひとつまとまりの単位となる点が異なる。)

つまり与那覇方言では、「3 モーラ」が単位となってまとまってひとつのフットを形成し、そのフット全体に H 音調 が指定される性質がある、と考えるのである。このことを、ここでは次のように図式化しておくこととする。

(10) 与那覇方言の音調実現の条件



ちなみに松森 (2013) では、H 音調だけでなく L 音調も、3 モーラのフットを単位として実現する、と考えていた。しかしその後、(少なくともこの与那覇方言では)「3 モーラを 1 単位として実現する」という条件にしたがうのは H 音調のみ、とする仮説のほうに考えが変化した。

その理由は、松森 (2013: 17-18) でも述べた通り、H 音調の連続は常に 3 モーラ分の長さを保とうとする傾向があるのに対して、L 音調のほうにはそのような制約はまったくないように見えるからである。たとえば AB 型の出だしに出現する L 音調に焦点を当てて、検討してみよう。

まず、本稿の (5), (6), (7) の例を参照しても分かるように、AB 型の出だしの L 音調は 2 モーラでも許されている。

また、AB 型の出だしの L 音調は、4 モーラ以上の長さにわたって連続することも許されている。たとえば、3 モーラ名詞から始まる名詞に NkeRdu (向格 NkeR + 焦点標識 du) という助詞連続が付加した (11) のような例を観察してみよう (与那覇方言の向格を、NkeR のほかに Nkai と発音する話者もいたが、ここでは NkeR のほうで統一することにする)。この AB 型の出だしの部分から分かるように、L 音調は 4 モーラの長さにわたって続いている。

(11) 3 モーラ名詞に NkeRdu が後接した場合の音調型

[AB 型]	fukuru N $\overline{\text{keR}} \overline{\text{du}} \dots$ (袋へ…)	akaci N $\overline{\text{keR}} \overline{\text{du}} \dots$ (血へ…)
	aVva N $\overline{\text{keR}} \overline{\text{du}} \dots$ (油へ…)	Nnagu N $\overline{\text{keR}} \overline{\text{du}} \dots$ (砂へ…)
[C 型]	ukama $\overline{\text{N}} \overline{\text{keR}} \text{du} \dots$ (釜へ…)	mipana $\overline{\text{N}} \overline{\text{keR}} \text{du} \dots$ (顔へ…)
	karazī $\overline{\text{N}} \overline{\text{keR}} \text{du} \dots$ (髪へ…)	minaka $\overline{\text{N}} \overline{\text{keR}} \text{du} \dots$ (庭へ…)

C 型の 3 モーラ名詞 ukama (釜) や mipana (顔) などに NkeRdu が付加した場合は、H 音調の連続は、

3モーラ分の長さに制限されていることが、(11) から分かる。この時、H音調の連続をあくまで3モーラの長さに保つために、語頭の1モーラ目を低下させ、たとえば $\overline{ukama} \overline{N} \overline{keR} \overline{du} \dots$ (釜へ…) のように、L音調から文節を始めている。

これに対して出だしの名詞がAB型の場合には、その文節の頭に出現するL音調は、3モーラ以上にわたって連続している。たとえば(11)では、 \overline{fukuru} (袋) や \overline{akacI} (血) に \overline{NkeRdu} が連続すると、 $\overline{fukuru} \overline{N} \overline{keR} \overline{du} \dots$ (袋へ…) のようになり、その文頭には4モーラにわたってL音調が続いていることが分かる。その際、このL音調の連続を3モーラ以内の長さに収めるためにわざわざ語頭をH音調から始め、 $\overline{*fukuru} \overline{N} \overline{keR} \overline{du} \dots$ のようにするようなことはない。つまり(H音調とは違って) 与那覇方言のL音調は、3モーラ以上の長さにわたって連続することが許されているのだ¹。

4モーラ以上の名詞から文節が始まる場合にも、同じようなことが言える。以下の例を見てみよう。

(12) 4モーラ名詞に \overline{meRdu} が接続した場合の音調型

[AB型]	$\overline{bikidumu} \overline{meRdu} \dots$ (男も…)	$\overline{karapaI} \overline{meRdu} \dots$ (灰も…)
	$\overline{IcImusI} \overline{meRdu} \dots$ (動物も…)	$\overline{piIcIkI} \overline{meRdu} \dots$ (刺青も…)
	$\overline{aragaN} \overline{meRdu} \dots$ (オカガニも…)	$\overline{bakamunu} \overline{meRdu} \dots$ (若者も…)
[C型]	$\overline{makugaN} \overline{meRdu} \dots$ (ヤシガニも…)	$\overline{katamusu} \overline{meRdu} \dots$ (肩も…)
	$\overline{upugai} \overline{meRdu} \dots$ (胃も…)	$\overline{sItugaI} \overline{meRdu} \dots$ (顎も…)
	$\overline{NnacIkU} \overline{meRdu} \dots$ (杵が…)	$\overline{saNsjiM} \overline{meRdu} \dots$ (三味線も…)

C型の4モーラ語である $\overline{makugaN}$ (ヤシガニ) や $\overline{katamusu}$ (肩) などに観察されるH音調は、3モーラ以上にわたって続いていないことが、(12) の例から分かる (C型の出だし部分を参照)。これに対して、AB型の $\overline{bikidumu}$ (男) や $\overline{karapaI}$ (灰) の出だしの部分には、L音調が4モーラ以上にわたって続いていることも、この例から分かる。

以上のような事実から総合的に考えると、「3モーラをひとつの単位として音調が実現する」という(10)の条件にしたがうのは、H音調のみに限定されている、と考えられる。

さて、AB型とC型のそれぞれの所属語彙には、次のような音調がレキシコン内部で指定されていることが分かった。

(13) 与那覇方言のレキシコン内部における音調指定 (暫定版)

[AB型の所属語彙]	LH 音調
[C型の所属語彙]	HL 音調

¹ 3モーラ名詞に \overline{nudu} (主格 \overline{nu} + 焦点標識 \overline{du}) が後接した文の場合の音調型でも、同様なことが言える (松森 2013: 6)。

[AB型] $\overline{manata} \overline{nudu} \dots$ (蛙が…)

$\overline{aVva} \overline{nudu} \dots$ (油が…)

[C型] $\overline{garasa} \overline{nudu} \dots$ (鳥が…)

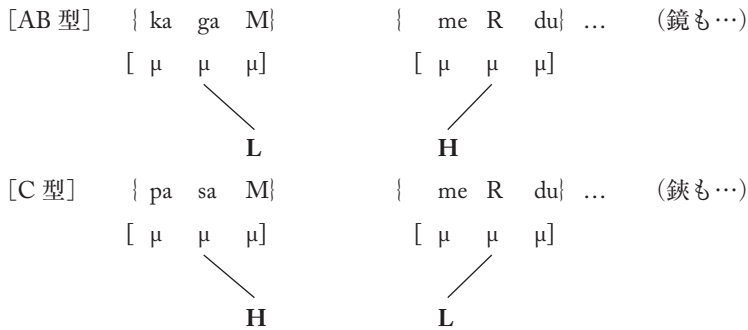
$\overline{poRkI} \overline{nudu} \dots$ (箒が…)

C型のほうは $\overline{garasa} \overline{nudu} \dots$ のようになり、H音調は3モーラ以上連続しないのに対して、AB型では $\overline{manata} \overline{nudu} \dots$ のように、4モーラにわたってL音調が連続することが許されている。

その際、それぞれの音調(L音調, H音調)が結びついて実現する範囲は、名詞、あるいは助詞(助詞連続)である。その範囲内に、3モーラをひとつの単位としてフットが形成され、そのフットに、H音調が結びついて実現する、と考えられる。以下では、この音調実現の範囲のことを「音調領域」と呼んで、それを { } で囲んで示すこととしたい。

たとえば、「3モーラ名詞+3モーラ助詞連続」の場合について、「kagaM meRdu ... (鏡も…)」と「pasaM meRdu ... (鉄も…)」を使って考えてみよう。この場合、LH音調が指定されているAB型の語 kagaM も、HL音調が指定されているC型の語 pasaM も、それぞれの音調が、各音調領域と結びついて、次のように実現する。

(14) 3モーラ名詞+3モーラ助詞連続の音調実現

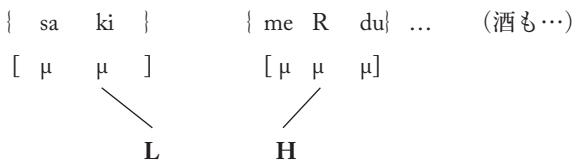


この際、AB型、C型のどちらの場合にも、そのH音調は3モーラを単位としたまとまりを含む音調領域と結びついていることが、(14) から分かる。つまりこの場合は、AB型、C型のどちらのH音調も、まさに(10)の条件にかなっているのである。そのため kagaM meRdu ... (鏡も…) 対 pasaM meRdu ... (鉄も…) のように、この2つの型の違いは、非常に明瞭に区別されて出現したものと思われる。

これに対し、同じ助詞に先行する名詞が2モーラの場合には、どうなるのであろうか。まず、LHという音調型を持つAB型の名詞から文節全体が始まる場合について、「saki meRdu ... (酒も…)」を例にしながら考えてみよう。

AB型のLHの最初のL音調は、文節の最初の音調領域にある {sa ki} と結びつき、次のH音調は、助詞連続の {meRdu} と結びついて、次のように実現する。

(15) AB型の「酒」にmeRduが後続する場合

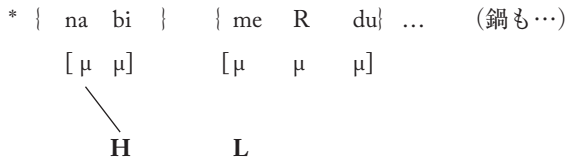


この場合、AB型に指定されるLH音調の後半部分にあるH音調は、2つめの音調領域に結びついて実現するのだが、その音調領域には3モーラの長さを持つ助詞連続 meRdu が存在している

ため、(10) の条件にかなっている。そのため、(予想通り) 「saki $\overline{\text{meRdu}}$... (酒も…)」のように出現する。一方、L 音調のほうには (10) のような条件は適用しない (L 音調は 2 モーラであっても実現できる) ため、(15) の出だしの L 音調は saki と結びついて実現する。

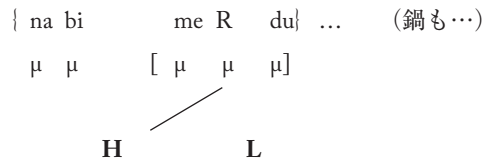
一方、HL という音調型が指定されている C 型の名詞から始まる場合は、一体どうなるのだろうか。「nabi meRdu ... (鍋も…)」を例にとって考えてみよう。この場合、その HL の最初の H 音調は、本来、文節の最初の音調領域 {na bi} と結びつくことが期待されるのだが、そもそも {na bi} という音調領域には、2 モーラ分の長さしか存在しない。これは「H 音調は、3 モーラのフットと結びつかなければならない」という (10) の条件に合致しないため、この H 音調はその音調領域 {na bi} の部分には、実現することができない。

(16a) C 型の「鍋」に meRdu から始まる文が後続する場合



このような場合、2つの音調領域がひとつにまとまってしまう (つまりこの場合は {na bi + meRdu} 全体が1つにまとまり)、H 音調は、そのあらたに形成された音調領域の後部の3モーラに結びついて、次のように実現する、と考えるのである。

(16b) C 型の「鍋」に meRdu から始まる文が後続する場合



最後に、何も音調が指定されなかったモーラにはデフォルトの L 音調が実現する、と考えておこう。このようにして、「鍋も」は nabi $\overline{\text{meRdu}}$ のように出現したものと考えられる。

その結果、(6) に見られるように、AB 型の名詞から始まる「酒も」と、C 型の名詞から始まる「鍋も」は、両者とも saki $\overline{\text{meRdu}}$... (酒も…), nabi $\overline{\text{meRdu}}$... (鍋も…) という、同じような音調型で出現することになってしまった、と考えられる。

与那覇方言では、(16a) → (16b) に見られるように、本来 H 音調が結びつくはずの音調領域が、たまたま 3 モーラの長さに満たない場合は、隣接した 2 つの音調領域を合体させ、より長い (モーラ数の多い) 音調領域を新たに作りなおす、ということが行われるようだ。この現象を、以下、「音調領域の再構築」と呼ぶことにしよう。

以上、2 モーラ以下の短い名詞から始まる文節の場合に限り、本来存在するはずの 2 つの型が合流してしまうような性質が、なぜこの与那覇方言に観察されるのか、について考察してきた。それは、けっして、名詞の持っている本来の型の区別そのものが消失 (あるいは曖昧化) してし

まっているからなのではなく、フットが関与した (10) のような制約がこの方言に存在すること、そして H 音調が実現するはずの音調領域が 3 モーラに満たない場合には「音調領域の再構築」が行われること、が原因となっているからである、という説を本稿では提案した。

3. 2 モーラ以下の短い名詞の型の対立を効果的に観察するために

それでは、文節の最初にくる名詞が 2 モーラの場合には、どのような助詞（助詞連続）が後続しようとも、AB 型と C 型はかならず同じ型で出現してしまい、その違いが「不明瞭」になってしまうのだろうか。この点に焦点を当てながら、名詞の後ろに付加する助詞や助詞連続をいろいろと変えて検討してみた結果、けっしてそうではないことが判明した。つまり環境さえ整えば、2 モーラ語でも、AB 型と C 型は、異なる音調型で出現するということが分かったのである。

まず、2 モーラの名詞であっても、その 2 種の型の区別が確実に観察できる理想的な環境として松森 (2013) が提示したのは、助詞連続 NkeRdu（向格助詞 NkeR + 焦点標識 du）をその名詞に後接させることである。たとえば、「袖に入れる sudi NkeRdu izjiI」のような文を、この向格助詞 + 焦点標識を使って作成してもらおうと、2 モーラ of AB 型と C 型の違いは、以下のように明瞭に出現した。

(17) 2 モーラ名詞に助詞連続 NkeRdu が付いた場合の 2 つの音調型

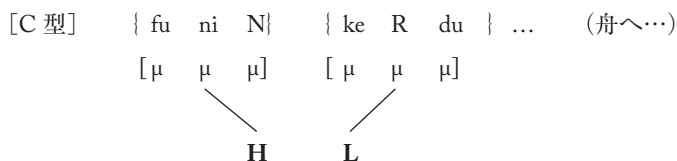
[AB 型]	saki N keR du ... (酒へ…)	fucI N keR du ... (口へ…)
	bata N keR du ... (腹へ…)	sudi N keR du ... (袖へ…)
[C 型]	funi N keR du ... (舟へ…)	nabi N keR du ... (鍋へ…)
	tagu N keR du ... (桶へ…)	usi N keR du ... (臼へ…)

この場合、向格助詞 NkeR の最初のモーラ N が、その助詞の頭部から切り離されて先行する名詞と結びつき、ひとつの音調領域を形成している、と解釈しなければならない。その結果、「名詞 + N」でちょうど 3 モーラの長さの音調領域が形成されることになる。このような場合には、HL の音調型を持つ C 型の最初の H 音調は、先頭の「2 モーラ名詞 + N」の部分に実現できるため、たとえば funi N keR du ... (舟へ…) のようになって、AB 型とは明瞭に区別できる音調型で出現するのである。

これを図式化すると、次のようになる。向格助詞 NkeR の N の部分は、その直前の名詞を中心とした音調領域内部に含まれて、{saki N}、あるいは {funi N} のようにまとまっていることに注目してほしい。

(18) 2 モーラ名詞 + 助詞連続 NkeRdu の音調実現

[AB 型]	{ sa ki N }	{ ke R du }	...	(酒へ…)
	[μ μ μ]	[μ μ μ]		
	L	H		



このように、たとえ2モーラ以下の名詞であっても、その後続く助詞（の一部）の助けを借りて3モーラの連続からなるフットを形成することができれば、(10)の条件に合致して、その部分にH音調が出現することができる。

もうひとつ、2モーラ名詞であっても2つの型の区別が明瞭に出現する環境として松森(2013: 4)が提案したのは、属格の nu (～の) を後続させて句や文を作ることである。たとえば、「雨の中、風の音」のような句を作ってもらくと、AB型とC型の2種の型の区別は、次のように明瞭に出現する²。

(19) 2モーラ名詞に属格の nu が後接した場合の音調型

[AB 型]	ami nu naka (雨の中)	kaR nu naka (井戸の中)	bata nu naka (腹の中)
	jaR nu naka (家の中)	jama nu naka (山の中)	kazi nu naI (風の音)
[C 型]	nabi nu naka (鍋の中)	kami nu naka (甕の中)	iM nu naka (海の中)
	tiI nu naka (籠の中)	pari nu naka (畑の中)	funi nu naI (舟の音)

つまり、モーラ数の少ない名詞の2種類の型の区別をはっきりと判別するためには、属格助詞 nu を後続させて何らかの文を考案し、そのピッチパターンを観察すればよいことが分かった。そこで「～の他はない～ nu pukaR njaRN」という文を作成し、いろいろな2モーラ名詞をその文に入れて検討を試みた結果、2モーラ名詞に見られるAB型とC型の型の違いは、次の(20)に見られるように、例外なく、明瞭に出現することが判明した³。(例文中、njaRNのnja部分の上に付けられた点線は、中音調を示す。)

² AB型の言い切り形については、松森(2013: 4, 11)では、jukI nu naI (斧の音)、kazi nu naI (風の音)のようになる、と報告したが、実際はjukI nu naI (斧の音)、kazi nu naI (風の音)、kaR nu naka (井戸の中)のように、属格助詞 nu の部分から上昇するようだ。しかし、「風の音が聞こえる (cIkarioI)」「井戸の中が見える (miRaijuI)」のような文を作成して発音してもらくと、語頭の低い部分が後ろに拡張し、kazi nu naI nudu ... (風の音が…)、kaR nu naka nudu ... (井戸の中が…)のようになる。それにより、C型の語から始まる funi nu naI nudu ... (舟の音が…)、kami nu naka nudu ... (甕の中が…)との対立が明瞭になる。

³ たとえば、saba (鮫)とsaba (草履)、piI (にんにく)とpiI (針)は、それぞれ音調型で対立するミニマルペアだが、この文を使えば、その違いがはっきりと分かる。

{	[AB 型]	saba nu	pukaR	njaRN	(鮫の他はない)
{	[C 型]	saba nu	pukaR	njaRN	(草履 ♪)
{	[AB 型]	piI nu	pukaR	njaRN	(にんにくの他はない)
{	[C 型]	piI nu	pukaR	njaRN	(針 ♪)

(20) 「～の他はない」という文における AB 型と C 型の区別

(唇歯接近音 [v] は、本稿では U で代用してある。)

[AB 型]	saki nu	$\overline{\text{pukaR}}$	$\overline{\text{njaRN}}$	(酒の他はない)
	kabi nu	$\overline{\text{pukaR}}$	$\overline{\text{njaRN}}$	(紙の他はない)
	juki nu	$\overline{\text{pukaR}}$	$\overline{\text{njaRN}}$	(斧の他はない)
	kIN nu	$\overline{\text{pukaR}}$	$\overline{\text{njaRN}}$	(着物の他はない)
	suU nu	$\overline{\text{pukaR}}$	$\overline{\text{njaRN}}$	(冬瓜の他はない)
[C 型]	$\overline{\text{kami nu}}$	$\overline{\text{pukaR}}$	$\overline{\text{njaRN}}$	(甕の他はない)
	$\overline{\text{nabi nu}}$	$\overline{\text{pukaR}}$	$\overline{\text{njaRN}}$	(鍋の他はない)
	$\overline{\text{sana nu}}$	$\overline{\text{pukaR}}$	$\overline{\text{njaRN}}$	(傘の他はない)
	$\overline{\text{sata nu}}$	$\overline{\text{pukaR}}$	$\overline{\text{njaRN}}$	(砂糖の他はない)
	$\overline{\text{piI nu}}$	$\overline{\text{pukaR}}$	$\overline{\text{njaRN}}$	(針の他はない)

この場合、名詞は 2 モーラであっても、属格の助詞 nu が、先行する名詞とともにひとつの音調領域の内部に含まれ、{saki nu} (酒の)、{kami nu} (甕の) のようなまとまりを作る。そうすると、それらの音調領域は、全体として 3 モーラから構成されることになる。特に C 型の {kami nu} の部分は 3 モーラとなったために (10) の条件にかなひ、その部分に H 音調が実現することになった、と考えられる。

これを図式化すると、次のようになる。

(21) 「2 モーラ名詞+～の他はない～ nu pukaR njaRN」の音調実現

[AB 型]	{ sa ki nu }	{ pu ka R }	...	(酒の他は…)
	[μ μ μ]	[μ μ μ]		
		L	H	
[C 型]	{ ka mi nu }	{ pu ka R }	...	(甕の他は…)
	[μ μ μ]	[μ μ μ]		
		H	L	

以上のような理由によって、この属格の nu (～の) を後続させた句や文では、AB 型と C 型の明瞭な型の対立が観察されたものと考えられる。

ここまで、2 モーラ名詞であっても、「名詞 + N (向格助詞の一部)」あるいは「名詞 + nu (属格助詞)」のように、全体として 3 モーラ以上の長さのフットを実現することができるような音調領域を作ってやれば、この方言の 2 つの型の違いは非常に明瞭に観察できることを示してきた。つまり、その出現環境に配慮して話者に発話してもらう句や文に工夫をこらせば、たとえ 2 モーラの名詞であっても、この方言の名詞が持っている 2 つの音調型の区別をはっきりと出現させる

ことが可能であることが分かった。

以上のような事実から、この与那覇方言は、けっしてそのアクセントが「曖昧化」しつつある方言なのではなく、2つの型がはっきりと区別できる確実な2型体系である、と記述することができる。

いずれにせよ、助詞連続 NkeRdu (向格助詞 NkeR + 焦点標識 du) の付加した文節から始まる文や、「名詞+属格助詞 (nu)」から始まる文を作成してチェックすることが、型の区別の判別に役立つことが分かった。以下の複合語を使った3型アクセント体系の確認においても、これらの助詞連続を付加して3つの型の違いを観察してみよう。

4. 与那覇方言のアクセント体系は「3型」である

前節までは、与那覇方言は確実な「2型アクセント」であることを見てきた。この節ではその結論をさらに押し進め、この方言が明瞭な「3型アクセント体系」であることを、「複合語」のアクセントを観察しながら論じていくこととする。

4.1 AB型は、複合語では2つの型に分かれる

「水、酒、味噌、耳」は、この与那覇方言ではすべてAB型の名詞であるため、その単独形は、これまで見てきた環境では、すべて同じ型で出現する。しかし北琉球の「系列別語彙」(松森2000, 2012)を参照すると、このうちの「水、酒」はA系列、「味噌、耳」はB系列に属している。その違いがこの方言の複合語に出現するのではないか、という予測をたて、これらの語を前部要素に持ってきた複合語「酒甕、味噌甕」などを作成し、観察を試みた。その複合語を、たとえば「酒甕に入れる」のような文に入れて検討した結果、予想通り、両者は明瞭な型の違いを見せた。

以後、「水、酒」から始まる複合語の示す型を「A型」、「味噌、耳」から始まる複合語の型を「B型」と呼んで、議論を進めることとしよう。

まず、A型の「水、酒」で始まる複合語「水甕、酒甕」と、B型の「味噌、耳」で始まる複合語「味噌甕、耳甕」の音調型を比較してみよう。これらに、型の区別を導くために効果的だとして第3節で提示した助詞連続 NkeRdu (向格助詞 NkeR + 焦点標識 du) を後接させ、「～へ入れる ~ NkeRdu izjiI」のような文を作って発話してもらったところ、A型とB型の音調型の違いは、(22)のように明瞭に出現した⁴。

(22) A型とB型の複合名詞 + NkeRdu 「～へ入れる」

[A型] mizu gami N keRdu... (水甕へ…) saki gami N keRdu... (酒甕へ…)

[B型] Mcu gami N keRdu... (味噌甕へ…) miM gami N keRdu... (耳甕へ…)

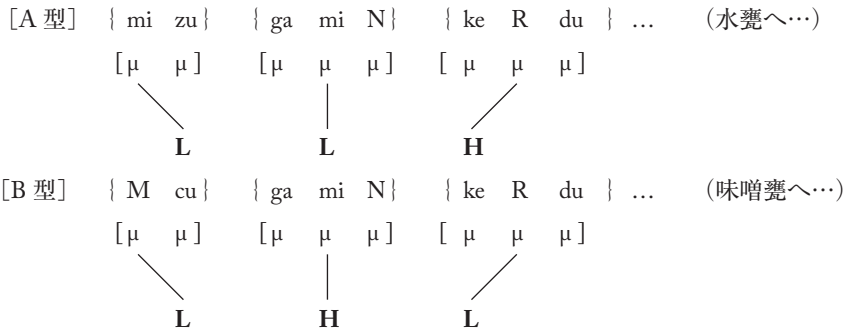
A型の場合は keRdu の部分が高くなるのに対して、B型の場合は、keRdu の直前の部分 (すなわ

⁴ ちなみに、これら複合語の単独形は、mizu gami (水甕) 対 Mcu gami (味噌甕) のような音調型となっていた。(なお、「酒甕」「耳甕」の単独形については調査を行っていない。)

ち複合語の後部要素 + N の部分) が高くなり、その後でピッチが下降していることが分かる。そして、A 型には LLH, B 型には LHL という音調の連鎖が、それぞれ、文節全体にわたって実現していることが分かる。

(22) の例は、各文節内に 3 つの音調領域 { } が存在し、かつ A 型には LLH, B 型には LHL という音調メロディーが指定されている、と考えることによって説明できる。それぞれの音調メロディーの中の L 音調, H 音調が、次のように、文節内部の各音調領域と結びついて出現している、と考えるのである。

(23) 複合語「水甕」「味噌甕」+ NkeRdu の音調実現



(23) の例で、H 音調の実現している領域内を見てみると、A 型の [keRdu] の部分も、B 型の [gami N] の部分も、それぞれ 3 モーラの長さを持っていることが分かる。つまりこれは両者とも、(10) の H 音調実現のための条件にかなっている。そのために、LLH と LHL というこの 2 つの型の本来の区別が、この環境では特に明瞭に出現することができたものと思われる。

この場合、助詞連続 NkeR + du の最初のモーラ N が、先行する複合名詞の後部要素の語根と結びついてひとつの領域を形成し、「語根 + N」で 3 モーラのフットが作られていることが、特に注目値する。このため、LHL という音調メロディーを持つ B 型のほうでは、2 モーラの「gami (甕)」がこの N の助けを借りて 3 モーラの音調領域 [gami N] を形成することができ、そのために (10) の条件にかなって、そこに H 音調が実現している。

次に、A 型と B 型の区別をさらにはっきりと確認するために、同じ複合語に、前節で見てきた属格形から始まる文「～の他はない ～ nu pukaR njaRN」も付けて、その音調型を観察した。その結果、やはり A 型と B 型の違いは次のように非常に明瞭に出現した。

(24) 「～の他はない」という文に見られる A 型と B 型の区別

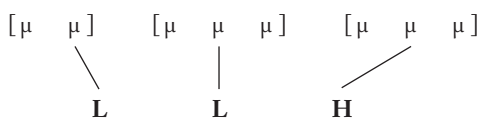
[A 型]	saki	gami nu	<u>pukaR</u>	<u>njaRN</u>	(酒甕の他はない)	
		mizu	gami nu	<u>pukaR</u>	<u>njaRN</u>	(水甕の他はない)
[B 型]	Mcu	<u>gami nu</u>	pukaR	<u>njaRN</u>	(味噌甕の他はない)	
		miM	<u>gami nu</u>	pukaR	<u>njaRN</u>	(耳甕の他はない)

さて、ここでも、A 型には LLH, B 型には LHL という音調メロディーが、「～の他は」まで

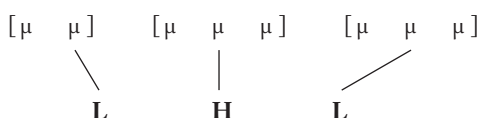
の文節全体にわたって、それぞれ実現していることが分かる。したがって、この例の文節内には「3つ」の音調領域が存在し、そのひとつひとつに、L音調、H音調が次のように結びついて実現しているものと考えられる。

(25) 複合語「水甕」「味噌甕」+ nu pukaR の音調実現

[A型] { mi zu } { ga mi nu } { pu ka R } ... (水甕の他は…)



[B型] { M cu } { ga mi nu } { pu ka R } ... (味噌甕の他は…)



ここで特に注目すべきことは、複合語の前部要素の長さである。たとえばA型の「水甕」の mizu (水) やB型の「味噌甕」の Mcu (味噌) という名詞は2モーラから成るものだが、それがひとつの音調領域を形成し、{mizu} {gami nu} {pukaR} (水甕の他は)、{Mcu} {gami nu} {pukaR} (味噌甕の他は) のようにまとまる。このように音調領域は、名詞のみならず、複合語の前部要素となる語根にも形成される。また、それが作られる際、その語根が(3モーラ以上でなく)2モーラから成るものだったとしても形成される。

しかしながら、特定の音調領域にH音調が実現できるか否かは、(10)の条件にかなっているかによって決まる。

ここで注意すべきは、(10)は「H音調のみ」に適用する条件なので、(25)の例は、両者とも(10)の条件には抵触していないことに注意しなければならない。つまり、LLHという音調型を持つA型も、LHLという音調型を持つB型も、どちらも出だしの音調はL音調なので、そのL音調が結びつく音調領域({mizu}あるいは{Mcu})が、たとえ3モーラに満たなかったとしても、その出だしのL音調を実現することが可能なのである。

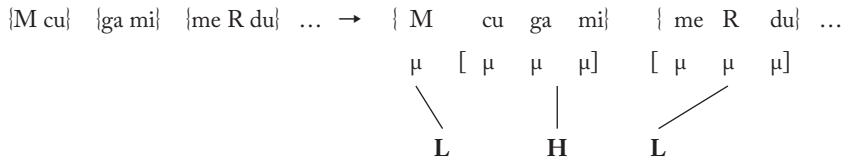
しかし、もしH音調が指定される音調領域が、たまたま3モーラに満たなかった場合はどうなるのだろうか。次の例は、A型の「水甕」とB型の「味噌甕」に、「～もある～meRdu aI」「～から出す～karadu idasI」, 「～より大きい～juzza upoRnu」を後続させた場合の音調型である。ここでもA型とB型の違いははっきり区別されているが、この場合、特にB型の「味噌甕」「耳甕」の音調型に着目してほしい。

- (26) A型とB型の複合名詞に meRdu, karadu, juzza を後続させた場合の音調型
- a. [A型] mizu gami $\overline{\text{meRdu}}$... (水甕も…) saki gami $\overline{\text{meRdu}}$... (酒甕も…)
 [B型] $\overline{\text{Mcu}}$ $\overline{\text{gami}}$ $\overline{\text{meRdu}}$... (味噌甕も…) $\overline{\text{miM}}$ $\overline{\text{gami}}$ $\overline{\text{meRdu}}$... (耳甕も…)
- b. [A型] mizu gami $\overline{\text{karadu}}$... (水甕から…) saki gami $\overline{\text{karadu}}$... (酒甕から…)
 [B型] $\overline{\text{Mcu}}$ $\overline{\text{gami}}$ $\overline{\text{karadu}}$... (味噌甕から…) $\overline{\text{miM}}$ $\overline{\text{gami}}$ $\overline{\text{karadu}}$... (耳甕から…)
- c. [A型] mizu gami $\overline{\text{juzza}}$... (水甕より…) saki gami $\overline{\text{juzza}}$... (酒甕より…)
 [B型] $\overline{\text{Mcu}}$ $\overline{\text{gami}}$ $\overline{\text{juzza}}$... (味噌甕より…) $\overline{\text{miM}}$ $\overline{\text{gami}}$ $\overline{\text{juzza}}$... (耳甕より…)

これらの例のB型は、本来、たとえば {Mcu} {gami} {meRdu} (味噌甕も) のように、3つの音調領域から成っていたと思われる。しかしこのような音調領域の区切り方だと、LHLの音調メロディーを持つB型のH音調が、2つめの音調領域 {gami} の部分に結びつくことになる。しかし、この部分には2モーラ分の長さしか存在しないため、これは明らかに(10)の条件一すなわち、「H音調は3モーラ以上連続しなければならない」という条件一に抵触している。そのため、そこにH音調を実現することができない。

このような場合、すでに(16a, b)で見たような「音調領域の再構築」が行われ、{Mcu} {gami} の部分にある2つの音調領域が {Mcu gami} のように、ひとつにまとまったものと考えられる。つまりこの場合、{Mcu} {gami} {meRdu} → {Mcu gami} {meRdu} のような「音調領域の再構築」が行われたために、最終的に(26)のそれぞれのB型の例に見られるような音調型になって出現したと思われる。これを図式化すると次のようになる。

- (27) [B型]の「味噌甕」に meRdu が後続した場合の音調領域の再構築



以上、A型とB型が合流してAB型になってしまった、とこれまで考えられてきた与那覇方言も、実は特定の環境でこの2種類の型の区別が、明瞭に出現する体系であることを見てきた。

4.2 複合語に見られる与那覇方言の3種の型の区別

さて、ここまでの段階で、これまで「AB型」と呼んできた型は、複合語では2つの型に分かれること、そしてA型はLLH、B型はLHLという音調メロディーが、各型を持つ語から始まる文節全体にわたって実現する、ということが判明した。さらに複合語を調査してみると、C型の語で始まる複合語はHLLという音調メロディーで出現し、上述の2つの型とは明確に区別されていることも分かった。

これを確認するために、ここでは「～畑」で終わる複合語に焦点を当て、その先頭の名詞部分をさまざまな名詞に入れ替えて、「～畑に行く ~ naka NkeRdu ikl」という文の中に入れて発話してもらった。その結果、与那覇方言には、次のような3種類の音調型の区別があることがはっき

りと分かった⁵。

(28) 複合語に見られる与那覇方言の3種類の型 (その1)

[A型] LLH型

$\overline{\text{kuRsu}}$	naka N	$\overline{\text{keRdu}}$...	(とうがらし畑に…)
$\overline{\text{mIRna}}$	naka N	$\overline{\text{keRdu}}$...	(萋畑に…)
$\overline{\text{buRgi}}$	naka N	$\overline{\text{keRdu}}$...	(砂糖黍畑に…)
$\overline{\text{suMna}}$	naka N	$\overline{\text{keRdu}}$...	(ねぎ畑に…)
$\overline{\text{piI}}$	naka N	$\overline{\text{keRdu}}$...	(にんにく畑に…)
$\overline{\text{guma}}$	naka N	$\overline{\text{keRdu}}$...	(胡麻畑に…)
$\overline{\text{suU}}$	naka N	$\overline{\text{keRdu}}$...	(冬瓜畑に…)

[B型] LHL型

$\overline{\text{suR}}$	$\overline{\text{naka N}}$	$\overline{\text{keRdu}}$...	(野菜畑に…)
$\overline{\text{mugI}}$	$\overline{\text{naka N}}$	$\overline{\text{keRdu}}$...	(麦畑に…)
$\overline{\text{uU}}$	$\overline{\text{naka N}}$	$\overline{\text{keRdu}}$...	(瓜畑に…)
$\overline{\text{mami}}$	$\overline{\text{naka N}}$	$\overline{\text{keRdu}}$...	(豆畑に…)
$\overline{\text{muM}}$	$\overline{\text{naka N}}$	$\overline{\text{keRdu}}$...	(グアバ畑に…)

[C型] HLL型

$\overline{\text{dakjoR}}$	naka N	$\overline{\text{keRdu}}$...	(らっきょう畑に…)	
$\overline{\text{cIguI}}$	naka N	$\overline{\text{keRdu}}$...	(ひょうたん畑に…)	
$\overline{\text{goRra}}$	naka N	$\overline{\text{keRdu}}$...	(ゴーヤ畑に…)	
$\overline{\text{basoR}}$	naka N	$\overline{\text{keRdu}}$...	(バナナ畑に…)	
$\overline{\text{ukjaN}}$	($\overline{\text{ukiN}}$)	naka N	$\overline{\text{keRdu}}$...	(うこん畑に…)
$\overline{\text{tamana}}$	naka N	$\overline{\text{keRdu}}$...	(キャベツ畑に…)	
$\overline{\text{soRka}}$	naka N	$\overline{\text{keRdu}}$...	(しょうが畑に…)	
$\overline{\text{zImami}}$	naka N	$\overline{\text{keRdu}}$...	(ピーナツ畑に…)	
$\overline{\text{ssjuC}}$	naka N	$\overline{\text{keRdu}}$...	(ソテツ畑に…)	

さて、(24)に関連して論じたように、この複合語の例でも、前部要素の部分にひとつの音調領域が形成されていることが分かる。たとえばA型のpiI(にんにく)やB型のsuR(野菜)という語根は、それぞれ2モーラの長さしかないのだが、その語根がひとつの音調領域となって{piI} {naka N} {keRdu} (にんにく畑に)、{suR} {naka N} {keRdu} (野菜畑に)のように、その語根部分にひとつの音調領域が作られている。しかし、これらの例では、複合語の出だしの音調領域部分には、(H音調ではなく) L音調が実現するために、それぞれ3モーラに満たないにもかかわらず

⁵ このうちB型については、複合語の前部要素が3モーラ以上になる語例を見つけることができなかった。また、「～畑」を後部要素を持つこれらの複合語の単独形の音調型は、まだ調査していない。

らず、そこにL音調が実現できたと考えられる。

さてここで問題となるのは、C型(HLL)の語が前部要素となって作られた複合語の場合である。HLLという音調を持つC型においては、もし文頭に来る語根(複合語の前部要素)が2モーラのものであったら、(10)の条件一すなわち、「H音調は3モーラ以上連続しなければならない」という条件一に抵触することになってしまう。このような事態が生じた場合には、どのようにその問題が解消されるのだろうか。このことを検討するために、2モーラの前部要素を持つC型の複合語を探したが、C型の複合語については、前部要素が2モーラ以下のものは、今のところ見つかっていない⁶。これは、今後の調査の課題としたい。

さらに次のような複合語でも、A, B, C型の違いは明瞭に出現した⁷。

(29) 複合語に見られる与那覇方言の3種類の型(その2)

[A型]	guma	Mcu	$\overline{\text{meRdu}}$	aI	(胡麻味噌もある)
	kacjuR	Mcu	$\overline{\text{meRdu}}$	aI	(かつお味噌もある)
	L	L	H		
[B型]	sIma	$\overline{\text{Mcu}}$	meRdu	aI	(島味噌もある)
	mjaRku	$\overline{\text{Mcu}}$	meRdu	aI	(宮古味噌もある)
	L	H	L		
[C型]	$\overline{\text{ssjuC}}$	Mcu	meRdu	aI	(ソテツ味噌もある)
	$\overline{\text{zImamI}}$	Mcu	meRdu	aI	(ピーナツ味噌もある)
	H	L	L		

ただし、この場合、LHLを持つはずのB型は、*sIma $\overline{\text{Mcu}}$ meRdu...ではなく、sIma $\overline{\text{Mcu}}$ meRdu...のように、複合語の最初の語根のsImaの後半部分から高く聞こえた。これは、H音調が実現することが期待される音調領域内にある複合語の語根部分Mcu(味噌)が、2モーラの長さしかないからだろう。そのために(10)の条件に合わず、「音調領域の再構築」が起こり、{sIma} {Mcu} {meRdu} → {sIma Mcu} {meRdu} となった。よって、このような音調型として出現したものと思われる⁸。

いずれにせよ、このように複合語を作成し、それに3モーラ以上の音調領域を後続させた文を作って発音してもらい、という方法を採用することによって、たとえば「とうがらし、胡麻」はA型、「野菜、島」はB型、「らっきょう、ソテツ」はC型、というように、各名詞について、それがこの

⁶ 唯一の例外は「ソテツ」という意味の「ssjuC」という語を前部を持つssjuC naka(ソテツ畑)やssjuC Mcu(ソテツ味噌)である。しかしこのssjuCという語も、語頭の重子音の前部を1モーラとカウントすれば、2モーラ語ではなく、3モーラ語と見做すことができる。

⁷ これらの複合語の単独形の音調型も、未調査である。

⁸ もしもこれらに向格の助詞連続NkeRduや、属格のnuを後続させ、「島味噌に入れた」「島味噌の他はない」のような文や句を作って発音してもらっていたならば、おそらくsIma $\overline{\text{Mcu}}$ N keRdu ..., sIma $\overline{\text{Mcu}}$ nu pukaR ...のようになり、sImaの部分にはっきりとしたL音調が実現したのではないだろうか。この予想が当たるかは、今後の調査で確認したい。

方言に認められる3つの音調型のどの型の所属語なのかを、判定していくことができることが分かった。

以上のような事実から、与那覇方言は3種の音調型（LLH, LHL, HLL）からなる「3型体系」であることが判明した。したがって（13）は、次の（30）のように修正しなければならない。

（30）与那覇方言のレキシコン内部における音調メロディー指定（修正版）⁹

[A型の所属語彙]	LLH	音調
[B型の所属語彙]	LHL	音調
[C型の所属語彙]	HLL	音調

それぞれの型の持つ音調メロディー（LLH, LHL, HLL）は、次のように、各音調領域と結びついて実現する。

（31）複合語＋助詞連続に見られる与那覇方言の3種類の音調実現の仕方

[A型]	{ ku R su }	{ na ka N }	{ ke R du } ...	（とうがらし畑に…）
	[μ μ μ]	[μ μ μ]	[μ μ μ]	
	↘		↗	
	L	L	H	
[B型]	{ mu gI }	{ na ka N }	{ ke R du } ...	（麦畑に…）
	[μ μ]	[μ μ μ]	[μ μ μ]	
	↘		↗	
	L	H	L	
[C型]	{ cI gu I }	{ na ka N }	{ ke R du } ...	（ひょうたん畑に…）
	[μ μ μ]	[μ μ μ]	[μ μ μ]	
	↘		↗	
	H	L	L	

ここで重要なのは、この与那覇方言の3種の型のすべてが明らかになるためには、単に3つの音節（あるいは3つのモーラ）がそろえばよい、というわけではないということである。この3つの型の区別の実現のためには、少なくとも3つの音調領域が並ぶことが条件となっている。つまり、たとえば「{kuRsu} {naka N} {keRdu}（とうがらし畑に）」や「{kacjuR} {Mcu} {meRdu}（かつお味噌も）」のように、その音調領域が「3つ」そろった場合にのみ、この3種の音調の違

⁹ ここまで検討してきたことから、この方言はアクセント言語ではなく声調言語の一種と見做すのが妥当かと思われる。もしこの方言が、「アクセント」体系であるのなら、そのアクセントは、たとえば、その語の「第1音節（モーラ）にある」、「第2音節（モーラ）にある」など、各語の特定の位置に置かれることになる。そして、その語のピッチ実現にかかわる特徴（ピッチの急激な下降や上昇の位置など）も、その語内部の特定の位置に出現することが期待される。しかしこの方言では、他の型と明確に区別される特徴が、当該の語の内部に常に実現するとは限らない。このような特徴を持つ体系では、語彙項目ごとにレキシコンに書き込まれている情報は、ピッチ変動の「位置」ではなく、ピッチパターン全体の「種類」である、と考えておいたほうが妥当ではないかと考えられる。

いが、はじめて出現するのである。

したがって、この与那覇方言の音調を担う単位 (TBU) は、(音節やモーラではなく)「音調領域」である、ということになる。

それでは、なぜ「3つ」でなければならないのか。これには必然的な理由がある。(30)を見ると、与那覇方言の3つの型は、LLH型、LHL型、HLL型となっており、H音調がかならずどこか1か所に出現することによって、この3種類の型の区別が保たれることが分かる。つまり、与那覇方言のこの3種類の型の区別をするためには、3つの要素の連鎖がどうしても必要なのだ、と言えるだろう。

またこの事実は、五十嵐ほか(2012)が池間島において行った一般化の妥当性を裏づける。五十嵐ほか(2012: 139)では、池間島の3種類の型の区別が出現する条件として、「みっつの語」から成る語連鎖でその3種類の区別がはじめて実現する、という記述を行っている。(ちなみに五十嵐ほか(2012: 139)で「語」と呼んでいるものを、本稿では「各音調の付与される範囲」という意味で「音調領域」と呼び替えた。たとえば{jama nu}のような名詞+助詞の連鎖や、{meRdu}のような助詞連続のことを「語」と呼ぶのは、妥当ではないと考えたからである。)

つまり、五十嵐ほか(2012)で指摘された池間島方言の場合とほぼ同じ条件が、与那覇方言でも確かめられたことになる。

さて、ここで強調すべきことは、池間島方言でも、与那覇方言でも、3種の型の区別をすべて明瞭に区別するためには「3つ」の要素が並ぶことが肝要、という点である¹⁰。ただし、その3つの要素の中身が何かについては、まだ具体的には分かっていない。さらに、宮古諸島の方言間にも、この中身が何かについて異なりが見られるのではないかと思われる。それを明らかにするための記述は、今後の重要な課題である。

これは今後の詳細な調査を実施した上でなければ断定はできず、今のところ単なる「見通し」にしかすぎないが、このように「3つ」の要素が並ぶ環境において、はじめて3種類の型の違いが明確になる、というような特徴は、宮古島全体にわたって広く観察できる特徴なのではないだろうか。

すなわち、他の宮古島の諸方言においても、「3つ」の要素が並んだ場合に的を絞って観察を行えば、これまで発見することができなかった「3種」の型の区別が浮き彫りになる、というようなことがあるのではないだろうか。このような新たな着眼点から、今後、宮古諸方言を再検討してみる必要があるだろう。

5. 宮古島アクセント記述方法についての提言と今後の展望

以上、与那覇方言では式保存が成り立っているという事実をもとにして、複合語に焦点を当てて観察し、この方言が「3型体系」であることを論じてきた。その結果、A型はLLH、B型は

¹⁰ それは単なる偶然の一致ではなく、そこには通時的な理由があるだろう。おそらく、池間島方言と与那覇方言が分岐する前の体系(「宮古祖語」の段階である可能性もある)においても、3つの要素を並べることによってはじめて3種類の型の区別がすべて出現するような体系が、すでに存在していたことが想定される。

LHL, C型はHLLという特徴を持っていることが明らかになった。

すなわち与那覇方言では、A型はLLH, B型はLHL, C型はHLLという音調メロディーが、レキシコン内部において語彙項目ごとに指定されている、としなければならない。

また、単純語を使用しても、なかなか「3型」までは見えてこなかった与那覇方言だが、複合語を使用すると、3つの型の区別の存在がくっきりと浮き彫りになることも見てきた。すなわち、(多良間島、池間島に続いて)与那覇方言にも、「3型体系」があらたに発見されたことになる。

本稿は全体を通じて、宮古諸方言のアクセント研究の方法論に対してひとつの「提言」を行ったことになる。それは、最終的にある方言がどのような体系を持っているかという結論を導くためには、従来と違った、より多角的なアプローチが必要だ、ということである。たとえば、名詞を3拍以上の長いものに変えてみる、(松森2010が多良間島で試みたように)さまざまな異なる助詞や助詞連続を付けてみる、(本稿で試みたように)複合語の型も検討してみる、(五十嵐ほか2012が試みたように)特定の述語を文節の後ろに後続させてその音調型を観察してみる、といったように、さまざまな角度からの検討を行う必要がある、ということである。

つまり従来の記述研究のように、比較的短い単純名詞に一部の助詞を付けて文節内の音調型を観察する、というだけでは、特定の方言の体系の全体像はなかなか見えてこないのである。宮古諸島の方言の音調体系の記述・観察のためには、以上のような多角的視点からの調査・検討がもっと多く成される必要があるということ、また、それによって、あらたな発見が成される余地がまだ十分あるということ、を、本稿では特に強調しておきたい。

これまで宮古諸島は、一般的にアクセント型の区別が不明瞭で、2型体系でさえも、その2つの型の区別が曖昧化しており、その区別も消失の傾向にある、というような説が、平山ほか(1967)の研究以来、広く一般に受け入れられてきた。このような「通説」のためだろうか、宮古諸島のアクセント研究は、その後、ごく最近になるまで、あまり大きな進展がなく今日まで至っている。この背景には、「宮古諸島のアクセントは、全体的に『曖昧化』あるいは『1型化』の途上にあるために、調査を実施しても、あまり実りある成果を得られないのではないか」というような、誤った「先入観」があったのではないだろうか。

しかしながら、こうした「先入観」に囚われずに実際に調査を行ってみると、宮古諸島には、明瞭な2型(あるいは3型)体系が「発見」できることが分かってきた。本稿は、与那覇方言を一例にして、このことを実証したことになる。

今回は、主として複合語を中心にして調査をした結果にもとづいて、与那覇方言の音調体系と、その仕組みについての記述を行ったのだが、その過程において、たとえば次のような興味深い事実がこの方言に存在することが、同時に明らかになった。

(32) 与那覇方言の特徴

- a. 3モーラをひとまとまりにしたH音調実現のための単位(本稿ではShimoji(2009)に従って仮に「フット」と呼んでいるもの)が存在する。
- b. 3種の音調型のすべてが明らかになるためには、少なくとも「3つ」の「音調領域」

が並列する必要がある。

- c. その音調領域は、名詞、名詞 + 1 モーラ助詞、複合名詞の語根、助詞連続、といった単位から形成されている。
- d. H 音調や L 音調は、音節やモーラを単位にして、それにひとつずつ結びついて実現するのではなく、「音調領域」を単位にして、各音調領域にひとつずつ結びついて実現する。(つまり、TBU は音調領域である。)

そして本稿では、先行研究がこの与那覇方言を、「1 型化している」、あるいは「かなり (型の) 曖昧化が進んでいる」(平山ほか 1967: 26) と記述してきたのは、この方言が (32) で述べたような性質を持っていることと、けっして無関係ではないことを論じた。これは、たとえば (32a) や (32b) のような性質があることが原因となって、特定の環境で 2 種の型の対立が合流してしまい、その違いが見えなくなってしまうからである。

より具体的に言うと、(32a) の条件を満たさない場合 (つまり H 音調の実現が期待される音調領域の内部が 3 モーラに満たないような場合) には、本来存在している 2 つ以上の型が合流してその違いが見えなくなってしまうことがある。また、(32b) の条件を満たさない場合 (つまり文節内の音調領域の数が「3 つ」に満たない場合) には、本来存在している 3 種の型の違いが確認できず、その 3 種の音調型のうちの A 型と B 型が合流してしまって、2 つの型しか観察できなくなる。

以上のような説を、本稿では提示したことになる。

(32) のような特徴を持った体系は、日本語の他の方言にはあまり例を見ないものであり、類型的な観点から見ても重要なものである。しかし、(32) の特徴のうちのいくつかは、おそらく、与那覇以外の宮古諸島の諸方言には、共有されている可能性が高い、と私は見ている。したがって (32) にもとづいた視点から、今一度、宮古諸島を詳細に調査しなおしてみる必要があるだろう。

その際、方言によって少しずつ、(32) の各項目について異なりが見られる可能性も予想される。たとえば、(32a) に関して言えば、与那覇では「3 モーラ」がひとつの単位となることが H 音調実現の条件となっているのだが、方言によっては「2 モーラ」を単位としているものも、数多く存在するに違いない。事実、五十嵐ほか (2012) では、池間島では 3 つの語のそれぞれが「2 モーラ以上」であることが条件である、と記述されている。

また (32b) に関して言えば、池間島では、3 つの音調領域のうちの最後が述語であっても許されるようだ (たとえば「錐もない lii | mai | njaRn」のような述語で終わる文の中の述語部分 njaRn も、池間島では「みつつの語」のひとつとカウントされることが、五十嵐ほか (2012) によって指摘されている)。しかし、与那覇方言にはこれまでのところ、そのような現象は観察されていない。

このように、3 つの音調領域が、いったいどのような要素から成り立っているのかについても、方言間に異なりが発見されることが予測される。その方言間の異なりを、今後、明らかにしていかなければならない。

宮古諸島には、松森（2010）の多良間島、五十嵐ほか（2012）の池間島、そして本稿で扱った与那覇方言だけでなく、他にも「3型体系」が今後、次々と発見されるに違いない。その際、上述のような方言間の違いと共通性を明らかにしていくことが、今後の記述研究における課題である。

いずれにせよ、宮古諸島では3つ以上の音調領域（五十嵐ほか2012の言葉を借りれば「語」）を並べれば、3種類の型の区別が出現する可能性が高いことが、経験的に分かってきた。このような知見を宮古諸島の他の方言にも応用すれば、これまで「2型」体系と考えられてきた方言が実は「3型」体系であったことを、あらたに発見できる可能性も出てきた。そればかりでなく、従来「1型」体系、あるいは型の区別が完全に消滅したと思われていた方言にでさえ、「2型」体系（あるいは「3型」体系の痕跡）が部分的に存在していることも、発見できるのではないだろうか。

繰り返しになるが、このような発見を成す際にもっとも大事なものは、これまでの記述方法とは異なった「あらたな発想と着眼点」なのである。

平山輝男（編著）（1983, 1986, 1988）の巻頭に提示された琉球方言全域にわたるアクセント分布図を鳥瞰してみると、宮古諸島は、琉球の中でも、もっとも型の区別の消滅が早く進行してしまった地域のような印象を受ける。しかし今後、本稿で提案されたようなあらたな視点からの記述研究がさらに進展するならば、この平山（編著）の提示した琉球アクセント体系の分布図も、いずれ大きく塗り変えなければならない日が到来するかもしれない。

6. まとめに代えて一宮古島の「3型体系」発見の通時的意義とその課題

前述の五十嵐ほか（2012）の池間島の記述は、宮古島内にも3型体系が確実に存在するということを指摘しただけでなく、その区別が琉球祖語の3種の区別（系列）と対応しているらしいことを示唆した、という点で、琉球語の通時的考察にとっても大きな前進であった。

しかしながらこの五十嵐ほか（2012）では、池間島は3種類の型のうち、A型の所属語彙が極端に少ないことも明らかにしている。つまり、琉球祖語に仮定されるA系列の候補語の大半が、池間島ではB系列の候補語と同じ型に所属している、ということも、同時に明らかにしたのである¹¹。

¹¹ このことを根拠にして、五十嵐ほか（2012）は、次のような見通しを提示している。

「池間方言は、（琉球祖語におけるアクセント型の区別を比較的忠実に保持した）三型アクセント体系から二型体系になる言語変化の過程の最終段階にある」（五十嵐ほか2012: 145）もしこの五十嵐ほか（2012）の見通しが正しいならば、池間方言は「宮古祖語」に想定される3型アクセントの各型の所属語彙を推定するには、適切な方言ではないということになってしまう。

しかし私見では、上述のような結論を導くのは時期尚早ではないかと思われる。このような結論を導くためには、あらゆる「みつつの語の連鎖」についても同様なことが言えるかを、池間島方言において詳細に検討してみなければならない。その検討の結果、まったく条件の異なる「みつつの語連鎖」を使った場合に、A型の所属語彙が、五十嵐ほか（2012）の発見したものよりも数多く存在することが確認できる、という可能性も、今のところ皆無とは言えないだろう。（たとえば、今回与那覇で考察した複合語（語根＋語根）＋助詞連続のような3つの語（本稿の「音調領域」）の連鎖で調査したら、A型の所属語がもっと増えるというようなことはないだろうか。）（想定可能な）すべての「みつつの語の連鎖」について検討し尽くした上で、なおかつA型に所属する語彙が、池間島ではある特定の語のみに常に限定されていることが判明した場合でなければ、五十嵐ほか（2012: 145）で述べられた、上述のような結論を導くことはできないだろう。

五十嵐ほか(2012)の提示した池間島よりも、もっと明瞭な形で、宮古島祖語に想定されるA, B, Cの3つの型の所属語彙を、忠実に再現できるようなアクセント体系は、他に存在しないだろうか。このような視点から、宮古諸島各地をさらに詳細に調査してみる必要があるだろう。

いずれにせよ、宮古祖語は「3型」、あるいはそれ以上の型の区別を持つ体系だったことは、もはや間違いないと言える。それが、どのような性質の体系だったか(たとえば、アクセント体系だったのか、声調体系だったのか)を明らかにすることは、今後の通時的研究の課題である。

もうひとつの大きな通時的課題としては、いくつかのモーラがまとまって作られる「フット」という音韻単位の通時的な位置づけである。本稿で扱った与那覇方言や、Shimoji(2009)の提示した伊良部島に認められているような3モーラ(あるいは2モーラ)をひとまとまりとした音調実現のための単位は、果たしてどの段階から宮古諸島に出現したのだろうか。それは「宮古祖語」の段階からすでに存在していたのだろうか、それとも宮古島諸地域の「地域特徴」として、後から各地で発達したものなのだろうか。もし后者であるとするれば、それはいったいどのようなことが原因となっているのであろうか。

また、仮にフットが「宮古祖語」(あるいは「南琉球祖語」? 「琉球祖語」?)にまでさかのぼれる音韻単位だとすれば、一体なぜその言語体系に、このような言語単位が生じたのだろうか。それは何を原因として発生し、どのようなプロセスを経て発達したものなのか。また、無標のフットが3モーラを1単位とする方言と、2モーラを1単位とする方言とが、同じ宮古島の中に存在しているようだが、そのような違いは、それらの言語体系のどのような特徴が原因となって生じたものなのだろうか。

そのような諸々の問題について、確かな通時的考察を行うためには、その手がかりとなるデータが(現時点では)少なすぎる。そのためには、そうした考察を可能にする記述研究の進展とデータの蓄積が大前提である。したがって、まずはできる限り早いうちに、宮古祖語に存在していたと考えられる3つの型の所属語彙リストを完成させ、それを使用して、宮古各地で調査を実施しなければならない¹²。

五十嵐ほか(2012)では、松森(2010)において提示された多良間島の語彙を使用して考察を行っている。しかし、宮古島にも明瞭な3型アクセントが今後も発見される可能性が高くなってきた以上、多良間島のデータに頼らずに、宮古島内部の諸方言のデータだけでもとづいて「宮古島祖語」に存在していたと思われる3種の型の所属語彙のリストを導き出すことも、もはや不可能ではない状況となってきた。(今回の与那覇方言で見たように、3モーラ以上の「長い」名詞においてはじめて型の区別が明瞭に出現するような体系が、宮古島には他にも数多く存在するか

¹² これまでに松森(2000, 2009, 2011, 2012)では、3型体系が観察されている北琉球(奄美沖繩の諸方言)のデータをもとにして、系列別語彙のリスト作成の準備作業を進めてきた。しかし、北琉球で開発された系列別語彙を、宮古諸島の記述調査にそっくりそのまま採用できるわけではない。松森(2010: 注8)や五十嵐(2012: 59)にも指摘されているように、宮古諸島には、北琉球諸方言とのアクセント型の対応が不規則な語彙が、少なからず存在する。したがって、本稿で示唆したような発見を成し遂げるためには、今後、宮古島に特化した「通時的考察のための語彙リスト」(宮古祖語に存在していたと考えられる3種の型のそれぞれに属すると考えられる語彙のリスト)を作成した上で、それを使った調査を行っていかなければならない。

もしれない。そのようなことを考えると、3 モーラ、できれば4 モーラ以上の長さを持つ語彙の、アクセント型別のリストを充実することが、特に求められている。

いずれにせよ、多良間島方言、池間島方言に続き、与那覇方言にもあらたに3型アクセントが発見されたということは、このような通時的課題の解決へ向けての大きな前進であると言えるだろう。

参考文献

- 平山輝男（編著）（1983）『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』東京：桜楓社。
- 平山輝男（編著）（1986）『奄美方言基礎語彙の研究』東京：角川書店。
- 平山輝男（編著）（1988）『南琉球の方言基礎語彙』東京：桜楓社。
- 平山輝男・大島一郎・中本正智（1967）『琉球先島方言の総合的研究』東京：桜楓社。
- 五十嵐陽介（2012）「南琉球宮古語与那覇方言の名詞アクセント体系：初期報告」『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 南琉球宮古方言調査報告書』（国立国語研究所共同研究報告 12-02），53-68。東京：国立国語研究所。
- 五十嵐陽介・田窪行則・林由華・ベラルー トマ・久保智之（2012）「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』16(1): 134-148。日本音声学会。
- 松森晶子（2000）「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発—沖永良部島の調査から」『音声研究』4(1): 61-71。日本音声学会。
- Matsumori, Akiko (2001) Historical tonology of Japanese dialects. In: Shigeki Kaji (ed.) *Proceedings of the symposium: Cross-linguistic studies of tonal phenomena: Tonogenesis, Japanese accentology, and other topics*, 93-122. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies.
- 松森晶子（2008）「書評：崎村弘文著『琉球方言と九州方言の韻律論的研究』」『日本語の研究』4(1): 137-143。日本語学会。
- 松森晶子（2009）「沖縄本島金武方言の体言のアクセント型とその系列—『琉球調査用系列別語彙』の開発に向けて」『日本女子大学紀要 文学部』58: 97-122。日本女子大学文学部。
- 松森晶子（2010）「多良間島の3型アクセントと『系列別語彙』」上野善道（監修）『日本語研究の12章』490-503。東京：明治書院。
- 松森晶子（2011）「喜界島祖語における3型アクセント体系の所属語彙—赤連と小野津の比較から」『日本女子大学紀要 文学部』60: 87-106。日本女子大学文学部。
- 松森晶子（2012）「琉球調査用『系列別語彙』の素案」『音声研究』16(1): 30-40。日本音声学会。
- 松森晶子（2013）「宮古島与那覇方言のアクセント交替—3モーラのフットを持つ方言—」『日本女子大学紀要 文学部』62: 1-21。日本女子大学文学部。
- 崎村弘文（2006）『琉球方言と九州方言の韻律論的研究』東京：明治書院。
- Shimoji, Michinori (2009) Foot and rhythmic structure in Irabu Ryukyuan. *Gengo Kenkyu* 135: 85-122.

The Discovery of a Three-pattern Accentual System in Miyako Ryukyuan: The Yonaha Dialect

MATSUMORI Akiko

Japan Women's University /

Invited Professor, Department of Language Change and Variation, NINJAL [-2013.03] /
Project Collaborator, NINJAL

Abstract

Previous studies have argued that the Yonaha dialect on the island of Miyako in the Ryukyu-speaking area has two accentual patterns, but that the two patterns cannot be clearly distinguished from one another.

This paper, in contrast, shows that the two-pattern accentual system in the Yonaha dialect is clearly maintained, especially in particular types of phrases or sentences in which an H-tone is realized on a three-mora foot. Furthermore, on the basis of observations of compound accentuation patterns, this paper shows that the dialect in fact has a three-pattern system, although these three separate patterns can only be distinguished in phrases which consist of 'three' consecutive domains of tone realization.

This paper also does not rule out the possibility that the above features may be shared by other dialects on the Miyako islands, and that we may be able to find other three-pattern systems there if we analyze our observations in a similar manner.

Key words: three-pattern system, foot, Ryukyuan language, Miyako-jima, Yonaha dialect